

外来と在宅医療の“すき間”を埋める「おたずねフォン」 独居高齢者を見守る 医師、看護師

医療法人社団緑星会
どうたれ内科診療所
(千葉県松戸市)
理事長・院長
堂垂 伸治 氏

1975年、東京大学工学部航空学卒業。79年、千葉大学医学部に再入学し、85年、同大学卒業。同大学医学部第3内科所属。城東社会保険病院、千葉県救急医療センター、千葉西総合病院などを経て、99年、どうたれ内科診療所を開院。2004年12月、あい訪問看護ステーション、06年5月、あい居宅介護支援事業所を併設。日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医、千葉大学医学部臨床教授など

自動電話で独居高齢患者の安否を確認

首都圏の人口高齢化に伴い、独居高齢者が増加し社会問題となっている。都心のベッドタウンである千葉県松戸市では、2005年、100人を超える孤独死が確認された。築約50年の大規模団地「常盤平団地」では、住民の相次ぐ孤独死を契機に、自治会、社会福祉協議会、民生委員が中心になり「孤独死ゼロ対策」に取り組んでいる。

常盤平高齢者支援連絡会の専門部会長も務める、どうたれ内科診療所の堂垂伸治理事長・院長も、この問題に取り組む1人。堂垂氏は、07年に工学院大学と協力し、安否確認のための「1人暮らしあんしん電話」システムを開発。10年1月から(株)数理技研の協力を得て「おたずねフォン」として製品化して

いる(図)。

連絡を希望する独居の患者宅に週1回、自動電話をかけ、健康状態や安否を確認する。電話を受けた患者は、「もしもし、こちらどうたれ内科診療

所」という堂垂氏の録音音声につづき、元気ならダイヤルの「1」、体調不良なら「2」、要連絡なら「3」のプッシュボタンを押して安否を知らせる。患者が押した番号は診療所のパソコン画面に一覧表示され、毎朝一番に堂垂氏やスタッフが確認する。無料のサービスとして提供しており、現在、外来患者や在宅患者を中心に86人が利用している。

制度の“すき間”にいる患者を救う

「体調不良や要連絡を示す番号であれば、すぐに折り返し連絡し患者さんの状態を確認します。外来に来られる状態であれば来てもらいますが、足腰が弱っている方も多いので、必要に応じて往診します」

こう話すのは、おたずねフォンの患者対応を任されている下坂玲子看護師。また、患者が不在の場合は翌日に自動で再度電話がかかるが、それでも出ない場合は、直接、下坂氏から連絡を入れる。

「なお連絡が取れない場合には、民生委員やケアマネジャーなどに連絡し、最終的には家族に連絡するか、当院から往診し安否を確認します」

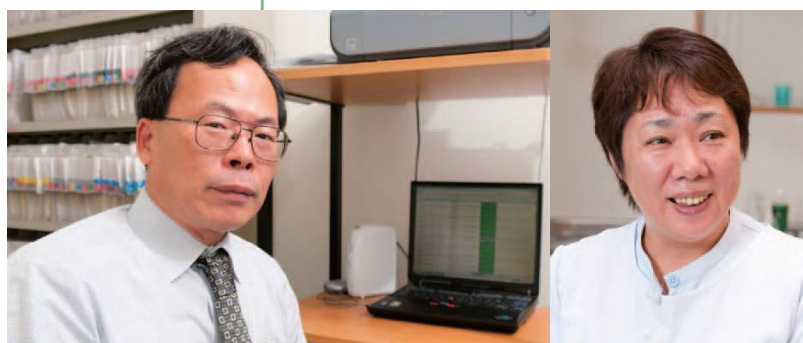
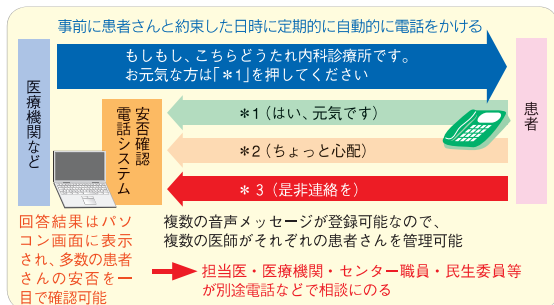
実際には、こうした要連絡のケースは月平均2～3回程度だが、外来通院や訪問診療を通して日ごろの患者の病態を把握しているからこそ、「何かおかしい」というサインを見落とさずにいられるという。

「高齢のため頻繁に外来に通えず、かつ介護サービス・在宅医療も受けていない制度の“すき間”にいる方にとって、おたずねフォンの取り組みが救いになれば」(下坂氏)

導入から3年。堂垂氏は、「当初は孤独死を防げればと導入しましたが、今はそれよりも独居高齢者に主治医に見守られているという安心感を与える効果があったと感じています」と語る。

社会貢献活動を通して独居高齢者の健康状態を把握できるのは、地域に根ざした医療を行う開業医ならではの強みだ。こうした取り組みの輪が広がることが大いに期待される。

図 1人暮らしあんしん電話“おたずねフォン”



堂垂 伸治 氏
・理事長・院長・

下坂 玲子 氏
・看護師・